

中野三敏著『江戸名物評判記案内』，中野三敏編  
『江戸名物評判記集成』

宮崎，修多  
国文学研究資料館助手

<https://doi.org/10.15017/11950>

---

出版情報：語文研究. 65, pp.62-63, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

## △紹介△

### 中野三敏著『江戸名物評判記案内』 同編『江戸名物評判記集成』

宮崎 修多

公文書館法というものおこなわれてよりアーキヴィストなる西歐流文書専門職のことが図書館界国史学界一部の取沙汰する所となっているときが、条文にこそ記されぬ其の仕事の一に後世有用の文書を選択するということありと、これはひとの受売りである。江戸期にかかる役があったか否か。国家百年の計は大田南畝をしてたいくつな文書整理に充てる贅沢をしても、坊間のいらぬ雑著にいちいち火をはなついとまをもたなかつた。江戸名物評判記集成おさむる二十篇、焚書のあやうきこそ無かつたものよく戦火と経師屋の目をかいくぐり、当代無用の書、揃らずも江戸の人びとと袖擦りあわせてものを見るべきよき手づるとなつてのこる。野傾評判記のすがたをかり雑物をあげつらうこれらの価値については、集成に先んじて岩波新書におこなわれた江戸名物評判記案内に区々説あり。案内と集成と両書相よりそえば所載評判記のかずかず、もはや横暴なアーキヴィストの手にかかつて火に投ぜられることもあるまい。それにしても三百年後、びあ総索引やウラ本大成を編むべく材を蓄わえる篤志家ありや。

作者評判千石節、宝曆四年刊、談義本。評判龍美野子、宝曆四年刊、魚介。三都学士評林、明和五年刊、学者文人。瓜のつる、明和八年刊、瓜。鞠蹴評判記、明和八年成、蹴鞠。儒医評林、明和九年

刊、学者医者。開帳花くらべ、安永二年成、開帳。初物評判福寿草、安永五年刊、初物。茶番遊、安永六年刊、膳部。江戸じまん評判記、安永六年刊、江戸名物。富貴地座位、安永六年刊、三都名物。新内跡追、安永頃刊、舌耕者。恋歌新色、安永十年成、新宿遊女。江戸土産、天明四年刊、黄表紙。俳優風、天明五年刊、狂歌。浪華学者評判記、天明七年成、学者。狂歌忠臣蔵当振舞、享和三年刊、狂歌。大夷評判記、文政元年刊、読本。当世名家評判記、天保六年刊、学者文人。当世名家大妙々奇譚、弘化四年刊、学者文人。以上集成所収の評判記、刊写混雑してすべて二十部。註記はおのおのが組上の対象である。このうち、三都学士評林、鞠蹴評判記(仮題)、開帳花くらべ、福寿草、茶番遊、江戸じまん評判記、新内跡追、恋家新色、忠臣蔵当振舞がこれによりはじめて江湖に出された。他は不完全なものをふくめ過去に翻字影印をもつが、いまは峻厳な校訂をへた末の翻印にて殆ど初見参にひとしい。名物評判記現存七十余種からわずか二十種を撰出せねばならなかつた苦渋はいさしらず、中に食べ物と文人が目立つのは江戸人のこのみというよりむしろ著者自身の偏僻か。著者作成にかかる名物評判記一覽をみて、役者の女房を評した女意亭有喃や評判娘の一連のものがおもしろうだと涎をたらすむきには気の毒だがすべて採られず。これまた著者の趣味であるか想像のかぎりではない。しかしなにより人物、書物、雑物などと目をわかつへたな啓蒙性を排しひとときに成立を追ってならべた所はみるべきであろう。儒者むすめ開帳洒落本献立初物まるまるひとつで都市の名物なりとは案内開口の章にくわしいが、また各書になう時世のうつりゆきをもって語らそうとするしかけと心得た。はたして著者のいう評判記の季節の終焉、すなわち妙々奇談ものの盛

行につらなる当世名家大妙々奇譚を惣巻軸に名物評判記集成一巻の幕となる。

評判の要諦は「何はともあれまず褒めようという暖かさ」にありと。案内四十三頁。そのあらわれのひとつが頭取の存在ということか。わる口ヒキに事欠かぬいまの世では、両者をやんわり窘めつ総体に対象をもちあげる温顔などこのうえなきいやなやつと断罪せらるるのみ。鼻もちならぬ均衡をこわしにかかるのはいまの美意識であろう。ひるがえって近世のさせる隠和な平衡感覚はまた、著者の説く名物評判記出生の土壤たる当代戯作のありかたにも通じる。

案内第二章。戯作とは戯れのみで成るものにあらず、真面目が一方で確としてこそそのフザケなりとして著者はそれを戯れとマジメの弥次郎兵衛図なる新考案の図をもって講じた。案内五十三頁。著者身辺の人びとには聞こえたこの絵解きがこたび陽の目をみたことをよろこぶが、見わたせばヤジロベエは戯作のみならず江戸文苑のここかしこで揺れているごとくである。和と漢、都と鄙、儒と文、雅と俗、格調と清新などすでに史家の提起する術語の錘はさらなり、ころみにこの評判記のいくつかを翻して、情報の盈溢がそれのみで刺き出しの我をはることなくいいしれぬ風趣を纏っておさまるのを見るがよい。評判龍美野子上巻、近江ものの太郎冠者が江戸日本橋に出て来てへんな魚屋から川魚の品題を授かるまでののんびりした狂言口調の開口部はべつにいうほどのくだりにあらざれども、欠けば殺伐ならんか。これはまさしくつりあいということである。著者は富貴地座位や福寿草紹介の段でそのあたりの叙情に筆及ぼすことを忘れない。案内第七章。勿論博洽をもってしられる著者は気分酔っぱかりでなく、大妙々奇譚の註釈書、杉原夷山著京撰名家評判

記贅註などという戦前の活字本をさりげなく取り出すといった辛口の手業をもみせる。いぶかる看官まずは五百円玉と引換えにその術策のほどをうかがうべし。

ヤジロベエの振れはどより大きいながらひとたび静止するや頭頂みごとに天をさす、著者の近世中期像はまた自身のうつくしい夢境でもあろう。評判記のおわりを近世後期、下司の勘繰りと下ネタにおちた妙々奇談モノにみる著者は、此方がよりいまの世によろこばれんことをほめかしたうえ「かくいう筆者も御同様」などと媚びてみせるが、案内百八十四頁、かかる口吻を真に受けてはならない。かねて江戸期は十八世紀をもって上々のものとする著者にしてみれば、資料性に富む嘉永安政の厚冊よりも瑣々たる明和の一本を内心いつくしんでやまぬ筈である。他をさしおいて、十三種の瓜の品評に終始する明和度判評判瓜のつるが集成採択の栄を得たが、どことなくおっとりした感懐かしめるこの小冊を拾いあげた著者のまなざしは、目立つ子でできる子を相手にしながらもおとなしくかつ芽えない子にそれとなく灌ぐ教師のそれに似る。評判の呼吸ここにいたって弥次郎兵衛先生が撰書の著眼におよんだ。しかし、江戸名物評判記集成享受の眼目はじつに瓜のつる一篇がたのしめるか否かにかかっているのである。

(案内、昭和六十年九月、岩波書店、新書版、四八〇円)

(集成、昭和六十二年六月、同書店、A5版、九〇〇〇円)